

# 作例中心主義を脱却しよう

## —言語科学における作例の意味について—

黒田 航

独立行政法人 情報通信研究機構 知識創成コミュニケーション研究センター

### 概要

この試論は、言語科学における作例の意味について考える。具体的には、次のように主張する: (i) 観察データの欠損を埋める場合、(ii) 本格的な研究を始める前に予備的スケッチを得る場合に、作例は条件つきで許容され、(iii) 心理実験の刺激文を作成するような特殊な場合、作例は推奨される。それ以外の場合、作例に依拠するのは研究の科学的価値を下げる効果しかない。従って、真に科学的に価値のある記述や説明を行おうと思ったら、それは作例に依拠する度合いが少なければ少ないほど好ましい。

## 1 作例中心主義はなぜダメか?

### 1.1 はじめに

私はことあるたびに、自分の知り合いには、言語科学者はチョムスキー革命以来の作例中心主義を脱却し、(生物学をモデルにした) 外界に客観的に存在するデータの観察を中心とする方法に立ち返って、作例を極力避けるべきだと主張している。そして、私はこの論理的な帰結として、コーパスに依拠する記述的研究の価値を非常に高く評価し、推奨している。

私は作例主義からの脱却が、今の言語学の現状(というか病状)を改善するための最良の策の一つだと考えるが、これには反論、反発もある。反論の一部には、以下で検討するように、確かに正当化している内容も含まれている。実際、私は作例が無条件にダメだと主張しているワケではない。私の主張の意味は正確にしておく必要があるだろう。

まず、私は作例中心主義がダメだと言っているだけであって、作例が一律にダメだと言っているわけではない。

とりわけ、私の主張の真意は「作例にはまったく

価値がない」という意味ではない。実例より作例が好ましい場合は、確かに存在する。だが、明らかに作例は無条件に有用ではなく、現時点での評価をすれば、明らかに控えられるべきものである。事実、チョムスキー革命以来の作例中心主義は、利より害が多い<sup>1)</sup>。

つまり、作例が有用な場合がどんな場合であるか、正確に理解しておく必要がある。それを明らかにするのが、このエッセイの狙いである。

### 1.2 先取り

本題に入る前に、一つ重要なことを指摘しておく。私の見る限り、作例中心主義から脱却すべきだという主張への人々が反発する最大の理由は「それは面倒だ」というものである。

#### 1.2.1

ふざけてはイケナイ。そういうことを言う怠惰な輩がありふれていることが、言語学の科学としての質を下げ、今の言語学をクズ同様にしている最大の原因なのだ。

手間暇かけてデータを解析するのが面倒で、都合のいい事例を二、三個デッチ上げて言語学をしているつもりの方々へ。あなた方には言語学は向いていません。言語学は、生物学と同様、もっと地道な研

<sup>1)</sup> 稀ではあるが、例外もある。例えば北川 [1] は生成文法家には珍しく、(i) 文法性と容認性をハッキリ区別し、(ii) 生身の人間が扱えるのは容認性のみで、文法性はそれから推定することしかできないと認めている。彼は更に論を進め、生成言語学には珍しく意味的、音韻的、統語的要因の拮抗があった場合、説明容易として優先されるべきなのは意味的、音韻的要因であって、統語的要因の説明上の優先順位は最下位であること、従って、要因の入念な統制の必要性を強調している。世の中の生成言語学者が彼のような人ばかりであったとしたら、今の言語学の風景は全然別なものになっていたと思うのは私だけだろうか？ 物理学の真似ゴトをしたり、「生物言語学」とかタワケたことを言う前に、言語学はまず実験科学としての手法を確立する方が明らかに必要である。その際に言語学者が学ぶべきなのは実験心理学の手法であろう。

究分野です。お願いですから、そういう怠け者は、言語学を止めて、他の分野で華を咲かせて下さい。

### 1.2.2

それから、もう一つ。非常に多くの(自称)言語学者が勘違いしているようだが、(理論)言語学は作文コンテストではない。どうしても作例がしたいなら、文学者になったほうがイイ。ただし、あなたが、故 James McCawley のような「自然(で愉快)な作例の達人」を目指すなら、少し話が別だ。彼の秀逸な作例の技法は [2, 3] などで観賞できる。McCawley ほどではないが、Paul M. Postal の作例も相当な熟練を見せているので参考になると思う。[4] の例文作りの執拗さには感心する。

ただし、どんなに面白い作例ができて、それが科学的な意味で言語の科学への貢献になるわけではないことは強調しておく。私は断言するが、実際のコーパスに発見される事例の方が、作例より遥かに分析し甲斐のある、面白いものだと思う。「事実は小説より奇なり」というのは言語の研究においても真である。

### 1.2.3

次に本質的な注意を一つ。作例の根本的な問題は、研究者が観察者になり切れず、研究者の意図が観察結果に影響を与えてしまうことにある。これは言語学が言語の自然科学であるならば、致命的な問題である。

言語学が言語の自然科学であるならば、基本データは客観的に存在しなければならない。だが、作例はこの客観性の条件を満足しない。その理由は、容認性の判定が一致せず、その不一致が合理的な形で標準化されてもいないからである。

言語の科学としての言語学が基本とすべきデータは客観的に研究者の外部に存在するデータであり、記述意図から自由になり切れない内観によって得られた作例ではない。それはどんなにエライ MIT の言語学者と彼の取り巻き連中が反対のことを言ったとしても、そうである。

心理学で内観法が批判され、行動指標による記述に取って代わられた経緯を見れば、作例中心主義の弊害は自明だと思われるのだが、そのことは言語学では、まったく自覚されていない。あまりに偉大な MIT の言語学者の威光に圧倒されて、彼の見当違いな言動に惑われる哀れな人々は今でも後を絶たない

からなのだろう。

作例は自然な形で基本データが得られない場合に、止むを得ず必要となる補助的、補完的手段である。科学的な観点から見れば、作例が基本データになっているような研究は、明らかに価値が低い。

### 1.3 補足

#### 1.3.1 補足 1: 作例の意義??<sup>2)</sup>

作例を実験になぞらえる人々がいる。このアナロジーは確かに、あるレベルでは妥当である。ただ、これが有効なアナロジーであるためには、前提条件が二つある:

- (1) 作例が実験に相当するものであるためには、それは十分に統制されていなければならない。
- (2) 作例が実験に相当するものであるためには、それは理論的利害から十分に独立していなければならない。

(1) が妥当かどうかですら怪しいが、これが仮に妥当だとしても、私が根本的に怪しいと思うのは、(2) の妥当性である。現在の作例中心の言語学の方法は、言語学者に自分の理論が説明できないデータはこの世に存在しないかのような振るまうことを可能にしているばかりでなく、そのような態度を取ることを奨励している。これこそが私が作例中心主義に反対する最大の理由である。

#### 1.3.2 補足 2: コーパス利用の意義<sup>3)</sup>

最近、私は自分のかつての指導教官の Y 先生と学生の指導に関して意見交換をした。その際、Y 先生から「拾ったデータを解析する実力がないのに単にコーパスからデータを拾って、データだけを意味も分からずに並べられても困る」という意見を頂いた。これは言われてみれば、まったくその通りである。次のことを確認しておく:

- (3) コーパスを調べるのは研究の手段であって、研究の目的ではない。

自分が理論、あるいはモデルを構築する能力をもっていない限り、コーパスから収集したデータを見てもたいして意味はない。

コーパスから拾ってきたデータを眺めていて、その「パターン」を説明する理論やモデルが自然に見

<sup>2)</sup> この節の内容は 11/06/2004 の更新によって加えられた。

<sup>3)</sup> この節の内容は 06/19/2004 の更新によって加えられた。

えてくるようになるには、実際には相当の相当優れた直観、あるいは熟練を要する。そういうセンスもなく、訓練もしっかり積んでいない人がコーパスから例を膨大に集めて来たところで、「突然、何か特別なことができるようにはならない」というのは本当である。

すべてのデータが同じように良いデータではない。データには良質のデータもあれば、悪質なデータもある。良質なデータを悪質なデータから峻別する能力は、良い科学者の基本条件である。

#### 1.4 Internet 検索の落とし穴: 正用と誤用の間<sup>4)</sup>

Internet 検索が普及し、それによって最近の言語研究は以前からは考えられない恩恵に預かっている。以前に較べると、圧倒的に客観的な形で議論を進めることができるようになった。しかし、なにより、Internet は多くの言語学者の想像力を越えた実例の宝庫であり、実例を調べることが多くの洞察をもたらすことが多い。

だが、ここには落とし穴もある。

Internet が普及するまで、言語学者のイチバン信頼の置けるデータベースは自分の言語直観であった。

ところが、人間の想像力は様々な形で制約されている。文法的な制約は、そのような制約の体系で正確にどれぐらいの比重を占めるものなのか、先験的に明らかであるわけではない<sup>5)</sup>。これは実証的な研究には桎梏になるが、幸い、Internet は上手に利用すると、この桎梏を緩めてくれる。

だが、そのような事情があればこそ、Internet にある言語データから何が、どれぐらいの信頼性で調べられるのかに関して、無反省でいるのはまずい。特に言語の科学である言語学にとっては、採集されたデータの信頼性という問題は本質的であり、この点に関する注意を促しておく必要がある。

特に無反省な Internet 検索結果の利用は、落とし穴になる可能性がある。なぜなら、検索結果が正例のみを含むとは限らないからである。例えば、06/11/2005 時点で Google 「時間をもてあそぶ」を検索した結果は、日本語と英語のページ約 442 件該当した。例えば次のような例がある:

(4) 手洗い洗車のため時間をもてあそんでいたひっさーが何気なく GS に置いてあった地図を見てやっとコースとは違う道を走行していることに気がつく。<sup>6)</sup>

(5) 手洗い洗車のため時間をもて余していたひっさーが何気なく...

だが、こういう明快な例ばかりではない。(6) が「時間をもて余す」の誤用であるとは言いがたい。なぜなら、(7) のように言い換えができないからである。

(6) 疲れた時にでもクリック連打して時間をもてあそびます。<sup>7)</sup>

(7) \*疲れた時にでもクリック連打して時間をもてあましてみます。

教訓は明らかに、次のことである:

(8) Internet (あるいはコーパス) 事例は正例のみを含むとは限らない。

従って、反例の構成には注意が必要である。「こういう例  $X$  が見つかった。これはあなたの理論  $T$  の説明  $E$  に対する反例だ」という議論を構成する際、 $X$  が正用であり、本当に「反例」になりうるものかどうかをちゃんと検討する必要がある。

ただし、厄介なことに、

(9) 正用と誤用の境界は、時に非常に微妙である。

このため、ある事例が反例になるかならないかの判断は常に客観的になしうるわけではない。例えば(6)の例を「時間を持て余す」の誤用と見なすのは、(7)という事実がある以上、それなりの論拠が必要である。

#### 1.5 標本採集の基本を理解する

信頼性のおけない事例は、正当な理由があれば、積極的に排除するべきである。

だが、これは、良いデータを必要とするという口実のもと、理想化が必要であるという理由で無制限にデータを「修正」してよいということではない。自分に都合の良い修正は「改竄」である。データを

<sup>4)</sup> この節は 02/24/2006 の改訂で追加された。

<sup>5)</sup> このような本質的に厄介な問題があるにも係わらず、生成言語学では文法的制約に最大限に比重を置こうとする。これは確証バイアス以外の何ものでもない。

<sup>6)</sup> <http://atypethefit.fc2web.com/page077.html> に発見された例。

<sup>7)</sup> <http://chu0gari.blog12.fc2.com/> に発見された例。

改竄をするとは、つまり「ズルをする」ことである。修正と改竄の区別するには、まず標本採集の基本を理解する必要がある。

科学者が良いデータを見ようと血眼になるのは、彼らが良い理論、あるいは良いモデルの構築のために良いデータを見る必要があるからである。実際、これがサンプリングの片寄った、劣悪な言語データしか見ない人（例えば生成文法家）の作るの言語理論が片寄った、劣悪な理論（e.g., Minimalist Program）になる理由でもある。自分の都合で説明に値するデータを選べるなら、どんな（バカバカしい）理論だって正当化しうる。

#### 1.5.1

というわけで、私もこれからは無条件にコーパスに準拠する研究を奨めるという態度は取らないことにした。

## 2 作例が好ましい場合とはどんな場合か？

以上の一般的な注意の下で、以下、作例が必要となる場合について、少し詳しく論じる。具体的には、次のように論じる：

- (10) 観察データの欠損を埋める場合、あるいは全体像を素描する目的のためになら、作例は条件つきで許容され。
- (11) 心理実験のために刺激文を作成するように、厳密な統制が必要な場合、作例は推奨される。

ただし、(11) は心理実験によらない、言語学者の「エッセ実験」には妥当しない。

#### 2.1 観察データ（e.g., コーパス）の欠損を埋める

ここでは詳しく論じないが、コーパスに基づく研究には多くの利点がある。だが、コーパスには一つ、明らかな限界がある。コーパスにすべての可能性が実現されているわけではない。ここで理解する必要があるのは次の点である：

- (12) コーパスに対象  $X$  が存在しないということは、 $X$  が現象として存在しないということ意味しない。

別の言い方をすれば、コーパスには欠損がある。この欠損が本質的でないと認められる場合、これは作例で埋めるしかない。この際、作例は正当なデー

タ補完の手段である。利用したコーパスに期待されている実例が見当たらない時、その例が存在すべき理由を明らかにした上で、その非在を補うのは、自然なことである。

ただし、作例によるデータ構成にあたっては、次のことには極力注意すべきである。

- (13) あらゆる作例について、それが作例であることを明示すべきである。
- (14) あらゆる作例について、第三者の判断による検証の手順を踏むべきである。

(13), (14) は共に提示されたデータの信頼性を保証するために不可欠である。

(13) については何も難しいことはない。まだ言語学では確立されていない習慣だが、論文の冒頭に例えば「例文はソースを示さない限り、筆者の作例である」と明記すれば済むことである。

理想を言えば、どんなに優れた直観を有する人でも、作例は一人で行ってはならない。自分以外の第三者の判断を容れ、(非)容認度の判断の「信頼性の目安」となる指標を明記すべきである。例えば、ある例文  $E$  について、自分を含めて5人の人間が容認性を判断し、そのうち4人が容認できるとし、1人が容認性に問題ありとした場合、その事実をハッキリと例文に付記すべきである。「この例文は筆者を含めて4人が容認可能な、自然な文だと判断し、1人はそうしなかった」という結果が  $E$  の容認可能性を保証しているかどうか判断するのは、あなたではない。

容認度の点に関して補足的に言うと、コーパスから収集したデータの信頼性を盲信してはいけない。最低限の容認性は保証されているとは言え、コーパスに存在するすべての用例が同じ程度に容認可能だというわけではない。

ここで、話をデータの欠損の話に戻す。

#### 2.1.1 可能性とその実現値の区別

ここで重要なのは、欠損の補完には必ず「事例の欠損が本質的でない場合に許容される」という条件がつくことである。ここで生じる問題は、「どんな欠損が偶発的か」である。欠損という概念は可能性の全体集合という概念の上に成立している。可能性を定義するのはデータ自体ではない。それを定義するのは、観察データの「解釈」に基づいて公式。

非公式に形成された言語に関する「理論」である。この理論は、良く悪くも、研究者の想像力の産物である。

これは生物学の置かれている状況と非常に良く似ている。研究者は限定されたサンプルを観察し、可能性の全体を推定するが、観察データから可能性の全体が一意に定まることは決してない。

物理学は、はじめに可能性の全体を決めたがり、演繹的なアプローチが主流となるが、生物学や化学の一部はそうではない。可能性の決定に関して漸進主義的、帰納的なアプローチを取って、可能性の集合を決定する問題は棚上げにしたままで話を進められるし、実際、そうしたほうが効率が良いという事情がある。

誤解してはならない。この不確定性は生物学の方法論的な限界によるものではない。そうではなく、それは生命現象という複雑な対象の本質的な茫漠性によるものである。「生命とは何か」など、誰も知らない。ノーベル医学賞級の研究者ですら（というより、そういう研究者なら、なおさら）「そんなことは、今もってまったく解らないし、解るようになる見込みもない」と言うであろう。

「生命とは何か」に対して、生物学がいまだに答えを出していないことは、それが進歩していないことを意味するか？ そんなことは断じてない。

これはどういうことかという、「生命とは何か」のような、どんなに興味深いとは言え、何とでも答えられるような、根本的に漠然としている問いに答えることは、生物学の成立にとっても、その進歩にとっても不可欠ではないということである<sup>8)</sup>。実際、生物学では、生命の可能性の全体を明らかにすることは、それが可能だとしても、段階的に、帰納的にしか行えない。

これは言語学においても、すぐれて真である。言語学は「言語とは何か」のような、どんなに興味深いとは言え、何とでも答えられるような、根本的に漠然としている問いに答えることは、言語学の成立にとっても、その進歩にとっても不可欠ではない。

<sup>8)</sup> ただし、これは Erwin Schrödinger が『生命とは何か？』で行った本質的示唆や Santa Fé Institute の顔 Stuart Kaufmann の一連の著作に意味がないということではない。生物学は未だに、これらの興味深い提案を全面的に受止める段階にはない。これは生物学の限界を示すものというより、生命現象の深遠さを示すものだと思ふ。

実際、言語の可能性の全体を明らかにすることは、それが可能だとしても、段階的に、帰納的にしか行えない。

生成言語学であれ、認知言語学であれ、諸々の言語学の流派は、まず「言語とは である」と決めてかかることから研究を始める。これがどういうバカバカしい帰結に至っているかは、すでに自明だと思うので、ここでは詳しく論じない。

生物学と同様、言語学でも常にモデルは必要である。だが、それは「言語のモデル」などという大袈裟なものでなくても、全然よい。現象ごとの個別的なモデルで、まったく構わない。例えば、血行のモデルと、繁殖行動のモデルは、完全に別のものである。実際、そのような個別的で具体的なモデルの方が正確な予測ができるし、その分だけ有用である。とにかく、下らない一般性を目指してはイケナイ。

#### 2.1.2 可能性を論じる際の注意

可能性の全体はデータの観察からは決まらないという事実から、言語能力という理想化が正当化される余地が出てくる。この理想化は、それ自体は無意味ではないが、これに関して、二つ注意しておく。

一つ目の注意は、方法論的な観点からのものである。理想化は必要最低限にするべきである。理想化が過度になると、直接に観察、記述される対象と、それを通じて説明される対象との乖離が大きくなり、科学的研究としての内実がなくなる。説明と事実のあいだの、信じられないほど大きな乖離が、現在、生成言語学が呈している病状である<sup>9)</sup>。

概して、理想化には歯止めが利かなくなる傾向があることには、極力注意しておく必要がある。そのためには、理想化は段階的に、帰納的に行うべきである。その理由は、すでに上で述べたように、言語の可能性の全体を明らかにすることは（それが可能だとしても）段階的に、帰納的にしか行えないからである。これは言語学において真であるばかりでなく、生物学においても真である。

もう一つ、中核と周辺の違いに関して、重大な実際の注意。どんな例を、どんな条件で周辺例、つまり例外と見なすか、その判定のための条件が明らかでなければならない。これは本質的に重要である。なぜなら、周辺性の判定条件が明確でないと、

<sup>9)</sup> [5]の言葉を借りれば、最小主義モデルはクズ言語学である。

理論家が自分の説明にとって都合の悪い現象を切り捨てるための方便となるからである。

とにかく、中核と周辺の違いは自明でも、自然な性質でもなくて、頻繁に「観察者の都合」によって恣意的に設けられるものであることを、しっかり念頭において欲しい。「偉大な指導者」の発言をあまりに真に受けると、時々、とんでもない科学的信用詐欺に遭う可能性がある。

## 2.2 本格的な準備段階のスケッチを得る場合

作例が許容される第二の場合は、本格的な研究を始める前に予備的スケッチ、全体の見取り図を得たい場合である。この段階はソフトウェア・エンジニアリングの用語を借りれば、プロトタイプング=試作の段階と言っても良いだろう。試作品を作ってみて、本物が動くかどうか様子を見るのが、試作である。もちろん、これは単なる「試し」なので、当然、その後には本格的な観察、記述が続くことが期待される。

別の言い方をすれば、今の言語学ではいつまでたっても試作レベルに留まっている研究が多すぎる。そのくせ、そういう研究は、普遍文法とか認知構造とかに関係する「下らない一般性」を誇って、記述的な研究を見下す傾向にある。もう少し理論中立的な記述の重要性を認め、記述のプロ意識の意識をもった研究者が増えるべきである。

## 2.3 心理実験の課題文を作る場合

最後の作例が第三の場合は、心理実験で課題文を作成する場合である。この場合、許容されるというより、作例が推奨される。理由は以下の通りである。実験の刺激文は、様々な観点から制御されていなければならない、自然言語データの中には最適な表現が存在しない場合がほとんどである。従って、作例は、むしろ自然データより好ましい。

だが、この設定は典型的な言語学の研究とは異なった状況で発生する特殊な目的故に必要とされるのであり、言語学者がこれをモデルと考える必要はない。

同様の理由から、言語学の作業環境でも minimal pairs の構成などのためには作例は避けられないこともある。それはデータの補完のためであれば、正当化される。だが、その構成によって補完されることになる基本データない場合には、そのような一見「実害のなさそうに見える」作例であっても、本質

的には危険である。

## 3 おわりに代えて

以上、簡単に言語の科学に置ける作例の役割について私見を述べた。要点を繰り返すと、次のようになる。

作例は自然な形で基本データが得られない場合に、止むを得ず必要となる補助的、補完的手段である。従って、科学的な観点から見れば、作例が基本データになっているような研究は、明らかに価値が低い。

もう少し有り体に言えば、作例に基づくのは—特にそれが統制されていない場合には—その研究の科学的価値を下げる効果しかない。従って、真に科学的に価値のある記述や説明を行おうと思ったら、それは作例に依拠する度合いが少なければ少ないほどヨイ。

検討されている事例が全部、作例などという研究は、論外である。そのような科学的蛮行がまかり通っているのは、言語学がまだまだ(自然)科学でない証拠である。

しかし、かくいう私も、修士論文と博士論文の一部では作例に依存した。今となって仕方のないことだが、あの当時、京大コーパスの存在を知っていたら、まったく事情は違っていたらう、と思う。

結論として言えることはタダ一つ: コーパスを積極的に利用しましょう。ただし、それが提供するデータの信頼性を過信、盲信しないように気をつけながら、です。

### 3.1 でも、あなたはこうも思う...

「作例なしってことになったら、何もできないじゃないか?」

「コーパス、コーパスとか言ったって、コーパスが存在しない場合、どうするの?」

#### 3.1.1 「何もできない」と苦情を言うあなたへ

第一の「何もできない」と苦情を言うあなたへ進言します。あなたが全面的に作例に基づいて行った研究の科学的な価値は、あなたが思っているほど高くありません。それは事実上、科学的に重要な研究がなされなかったのと同じことです。つまり、あなたは科学的には実質的に何も貢献していないのです(紙をムダにした分、罪が重いとすら言えます)。だから、あなたは「何もできない」ままでいいんです。

ほかの、もっと有益な仕事を探しましょう。絶滅しかけている言語の記載のためにフィールドワークに飛ぶ、なんて悪くないです。この分野は、圧倒的に人手が不足しています。

3.1.2 「コーパスがない、ない」と嘆くあなたへ  
「コーパスがない、ない」と嘆くあなたへ進言します。あなたはまず、未開の言語を必死の思いでフィールドワークしている人と自分を比べ、それに比べたら、自分がどんなに恵まれた環境に置かれているか、正しく理解する必要があります。あなたが普通の言語を研究しようとしている限り、データベースを構築するのは、単に面倒なだけです。本質的に困難な仕事ではありません。あなたが「手抜き」でない研究をしようと思うなら、それを厭わないはずで、手抜きの研究なら、しないで下さい。ほかの真剣な研究者の邪魔になるだけです。

コーパスが存在しないなら、自分で構築しましょう。プログラミングを勉強すれば、今の環境なら、比較的簡単です。何も、数百万形態素の大規模なコーパスを一人で作る必要はないのです。もっと小規模なもので良いのです。遠回りのようですが、それが結局、真理へ早く到達する道なのです。

3.1.3 どうしてもコーパスが利用できないと嘆くあなたへ

それでも、どうしてもコーパスが利用できないと嘆くあなたへ。あなたは心理学者が実験のために課題文を構成するのと同じ厳密さで作例するのがよいでしょう。すでに述べたように、「作例は無条件にイケナイ」というわけではないのです。イケナイのはイイ加減な作例です。それがダメな理由は、それが現在の言語学の研究の質を下げているからです。あなたがイイ加減でない作例をするなら、何の問題もないでしょう。

ですが、覚悟してください。イイ加減でない作例をするのは、非常に大変なのです。それは心理実験をやっている人に聞けば、すぐに解ることです。

あなたが言語の研究を通じて何らかの真理へ到達する気持ちがないなら、何をやっても同じことです。言語学をやるということは、言語現象の正確で、有意義な分析をすることです。理論に被れて、それをテキトーに、一つや二つ、思いついた例に適用することではありません。そういうイイ加減な気持ちなら、そもそも言語学をやる必要すらない

と思います。そうは思いませんか？

## 参考文献

- [1] 北川善久. 生成文法の言語分析. 言語 (特集: 21世紀の生成文法), Vol. 34, No. 5, pp. 38–46, 2005.
- [2] J. D. McCawley. *The Syntactic Phenomena in English, Vol. I and II*. University of Chicago Press, Chicago/London, 1988.
- [3] J. D. McCawley. *The Syntactic Phenomena in English*. University of Chicago Press, Chicago/London, 2nd edition, 1998.
- [4] P. M. Postal. *On Raising: One Rule of English Grammar and its Theoretical Implications*. MIT Press, 1972.
- [5] P. M. Postal. *Skeptical Linguistic Essays*. Cambridge University Press, 2004.